

熊本県は2012年熊本広域大水害、2016年熊本地震、2020年令和2年7月豪雨と度重なる自然災害に見舞われました。そんな中、くまもとアートポリスでは「みんなの家」を中心として、人と人とのつながりを大切にしながら復興支援に取り組んできました。これまでの取り組みを振り返りながら、復興する熊本の姿を全国に発信するため、仙台、東京、熊本の全国3カ所を巡回する展覧会を開催します。

くまもとアートポリス 巡回展

みんなの家、
後世へつなぐ復興

東京会場 2021.10.22Fri — 10.28Thu

東京メトロ銀座駅構内パネル展示

熊本会場 2021.11.3Wed — 1.16Sun

熊本市現代美術館

仙台会場 2022.1.23Sun — 1.26Wed

せんだいメディアテーク

くまもとアートポリスは

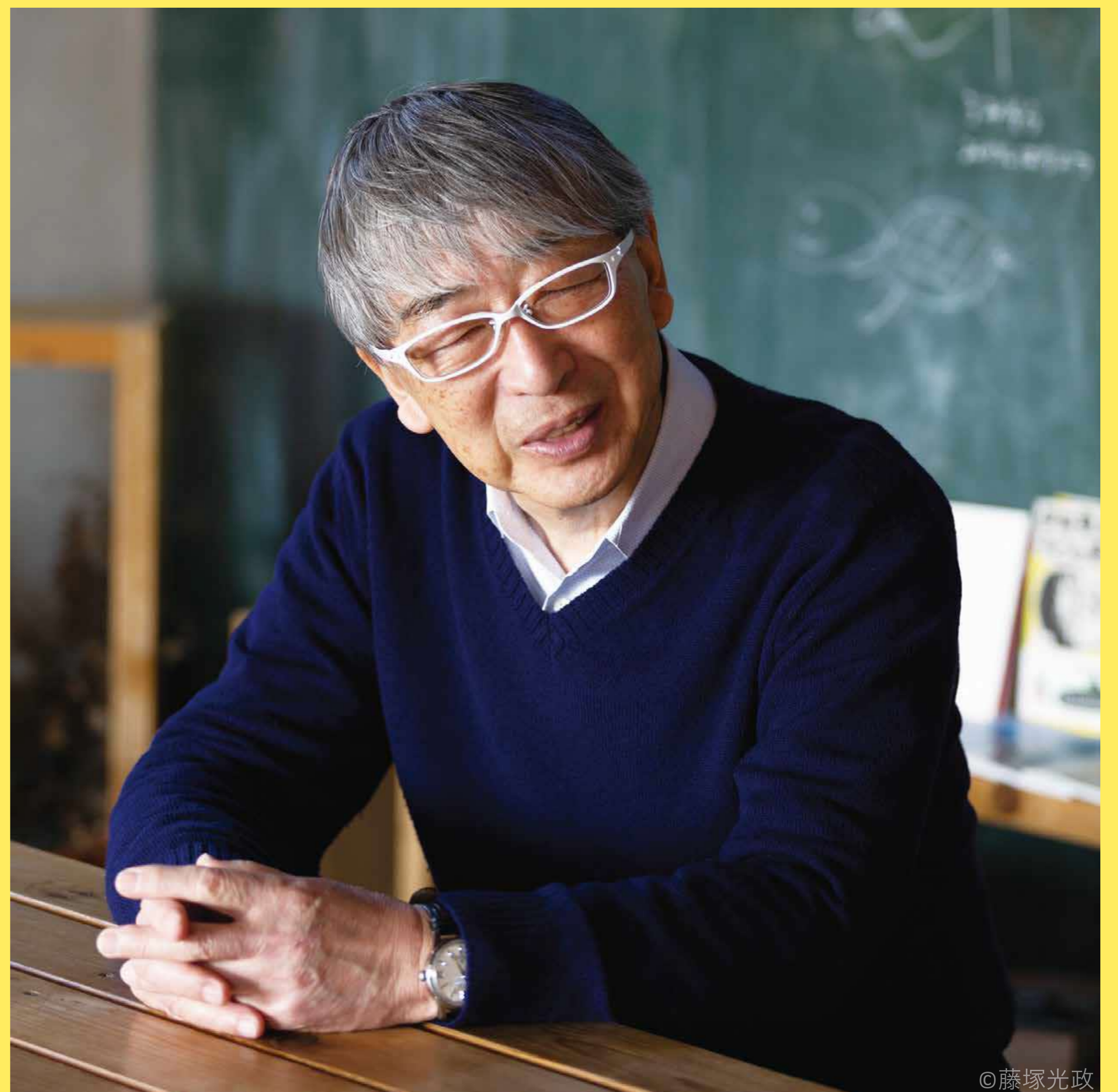
後世に残り得る文化的資産としての優れた建築物を造り、地域の活性化に資する熊本独自の豊かな生活空間を創造することを目指し、熊本県で1988年から継続している建築文化事業です。建築家の豊かな発想を生かすため、コミッショナーが設計者を選定する制度を取り入れており、現在は建築家・伊東豊雄氏が3代目コミッショナーとして「自然に開き、人と和す」をテーマに取り組んでいます。



ホームページ facebook twitter instagram YouTube

HPやSNSでアートポリスの取組みを発信しています！

建築家・伊東豊雄氏



©藤塚光政

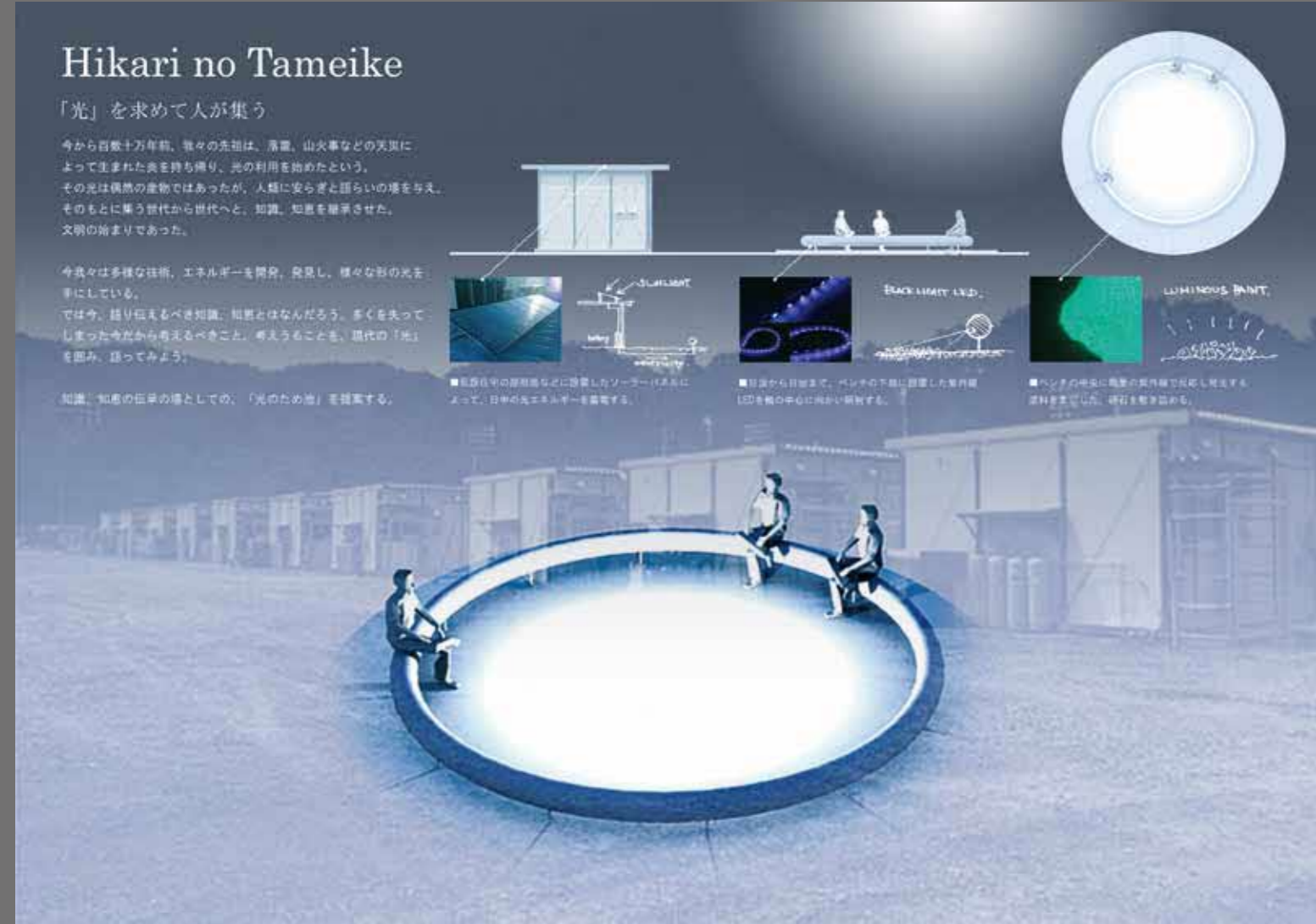
「みんなの家」って何だろう



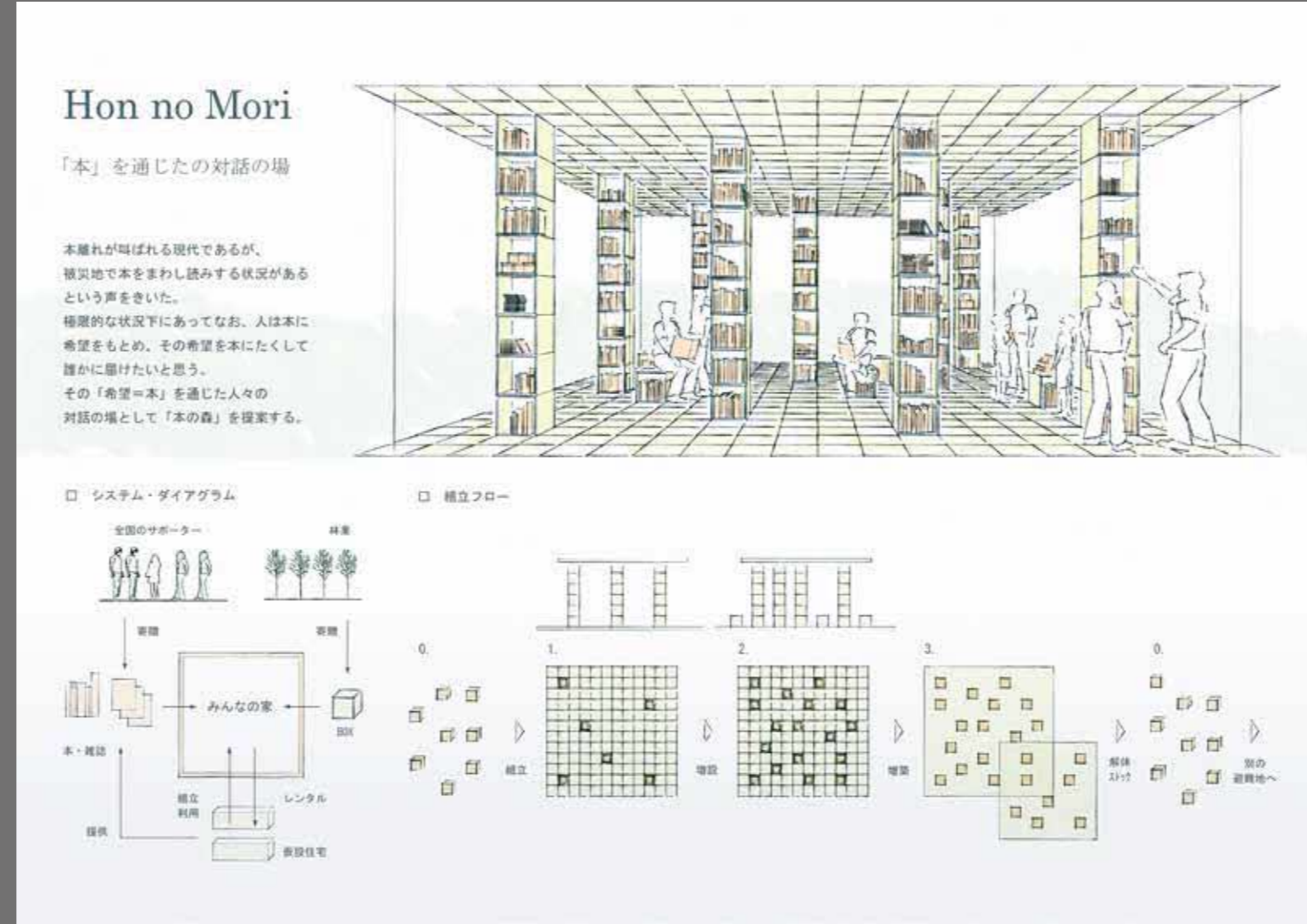
東日本大震災の発災後、被災地では厳しい仮設住宅での暮らしが続けられていました。建築家でくまもとアートポリスコミッショナーである伊東豊雄氏が、そのような被災地の現状を知り、家を失った方が集い、心の安らぎを得られるような場所を提供することで、少しでもその辛さを和らげることができないかという思いが形となったのが「みんなの家」をつくらうというプロジェクトです。東北では建築家を中心に16棟の「みんなの家」が整備され、その取組みは熊本へとつながり、熊本では仮設住宅などの建設にあわせて120棟を超える「みんなの家」が整備されています。

世界の建築家が描いた 「みんなの家」

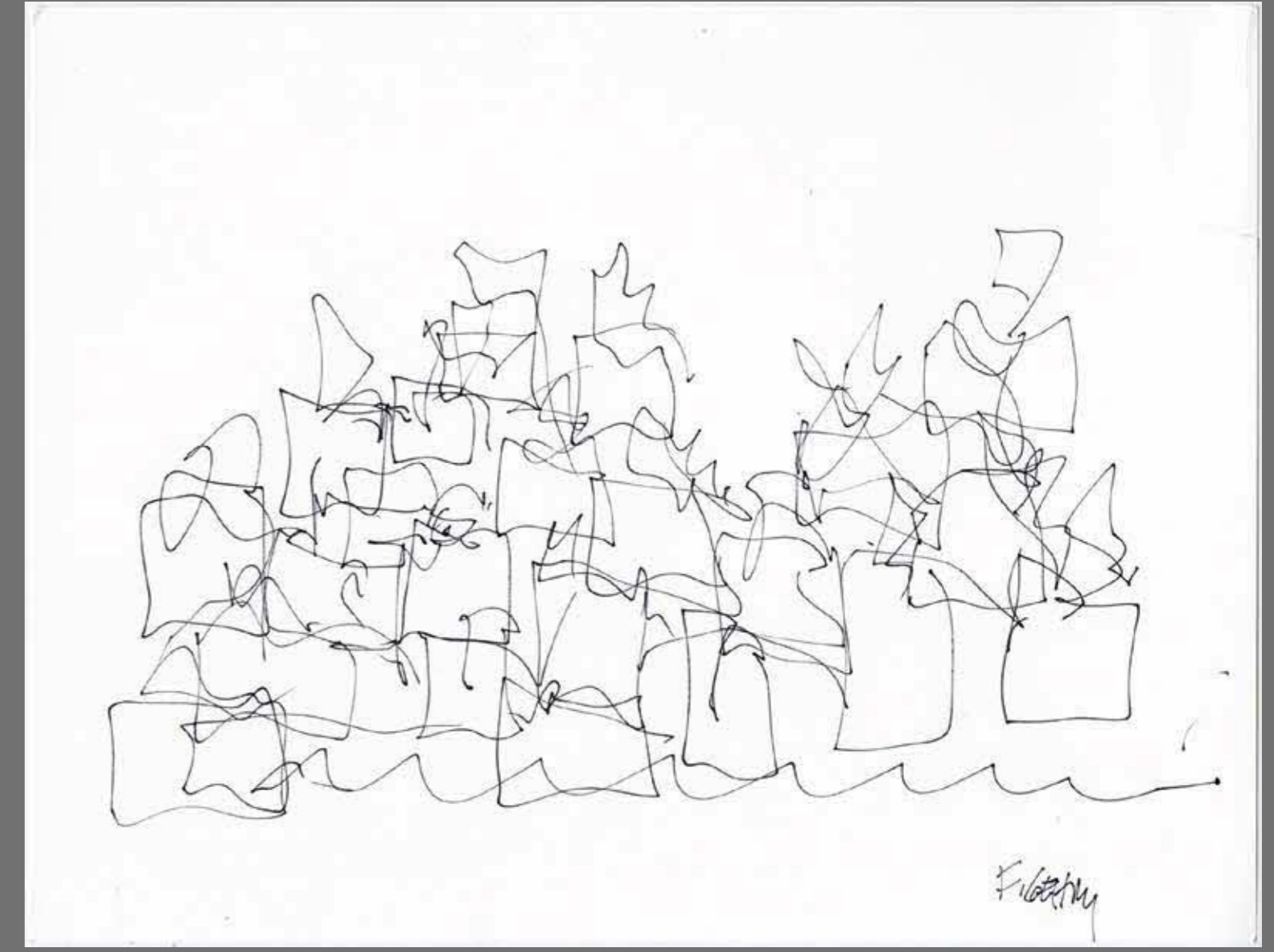
2011年、建築家・伊東豊雄氏らの呼びかけによって、世界22か国の171名(建築家、デザイナー、アーティスト、学生、子どもなど)からイメージスケッチが届けられました。



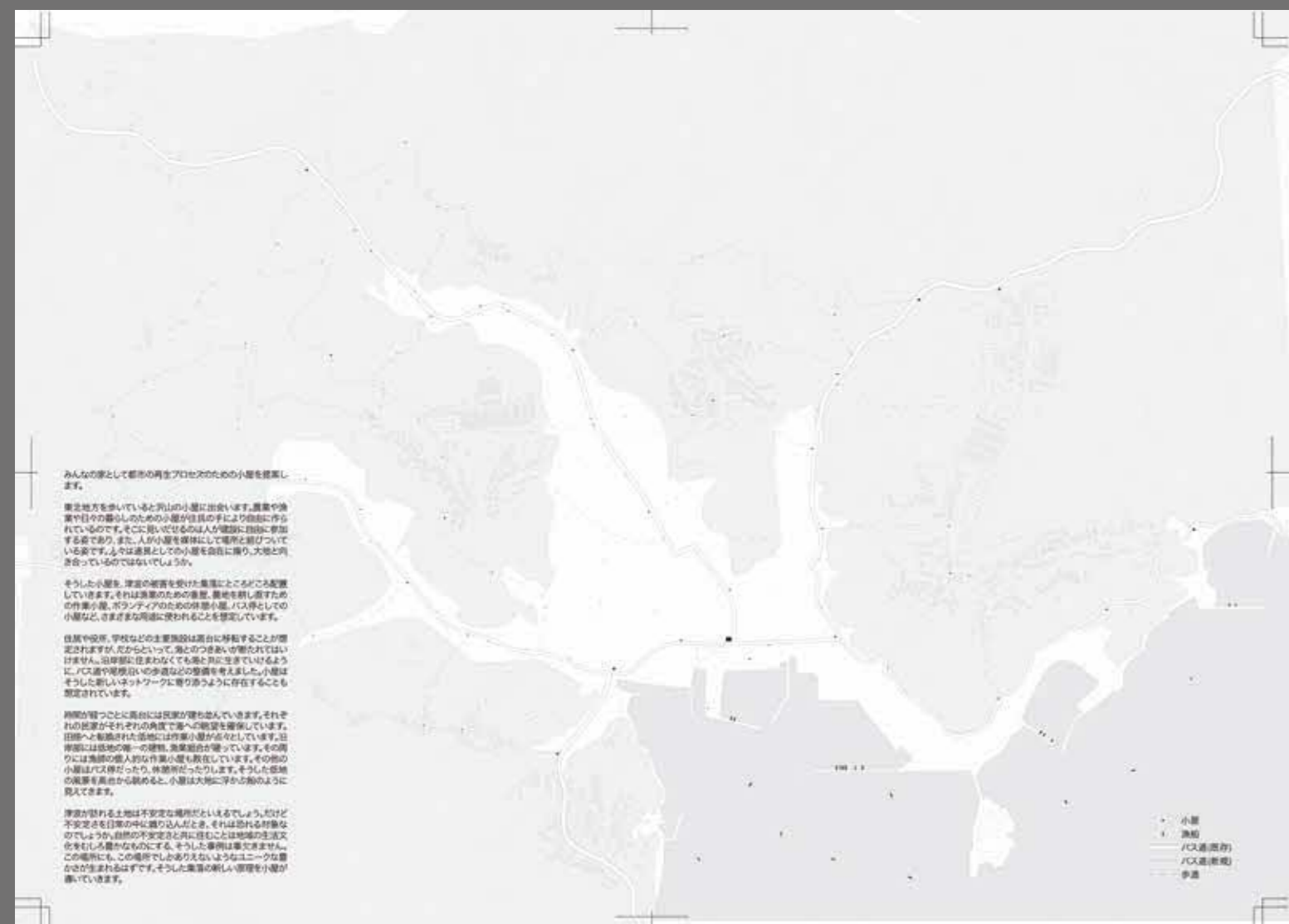
安藤忠雄 [建築家 / 大阪]



安藤忠雄 [建築家 / 大阪]



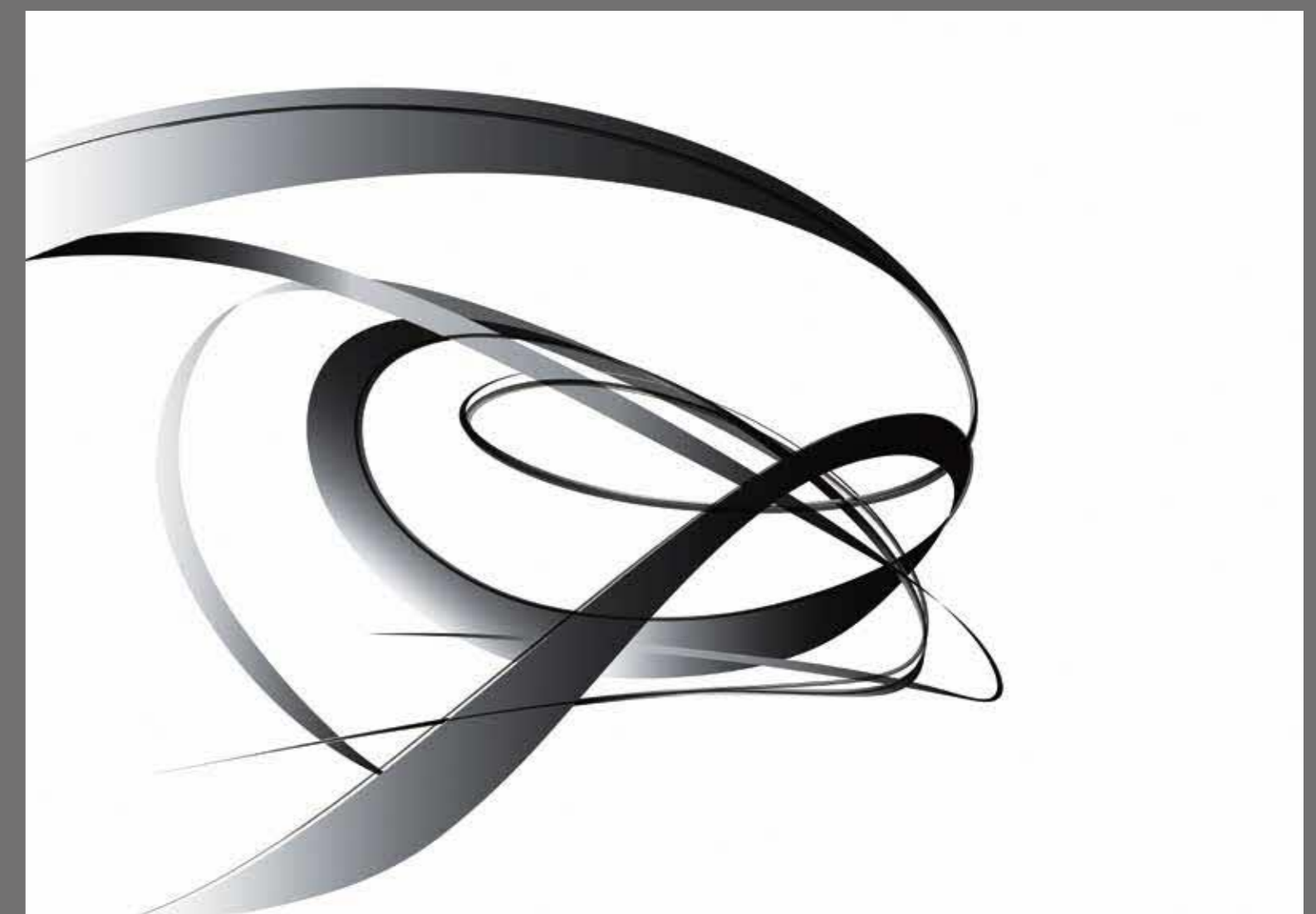
Frank Gehry [建築家 / アメリカ合衆国]



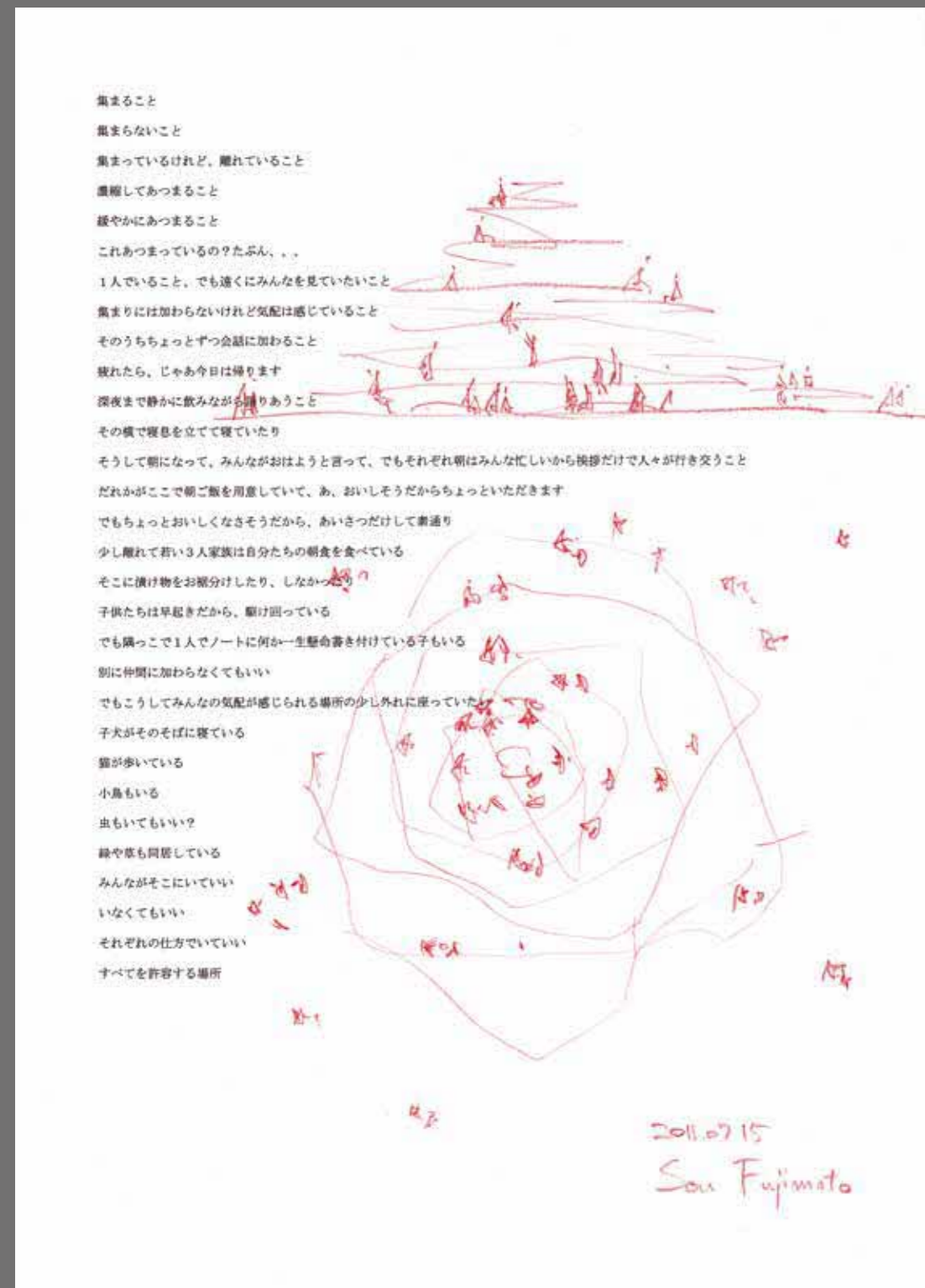
乾久美子 [建築家・Y-GSA 教授 / 東京]



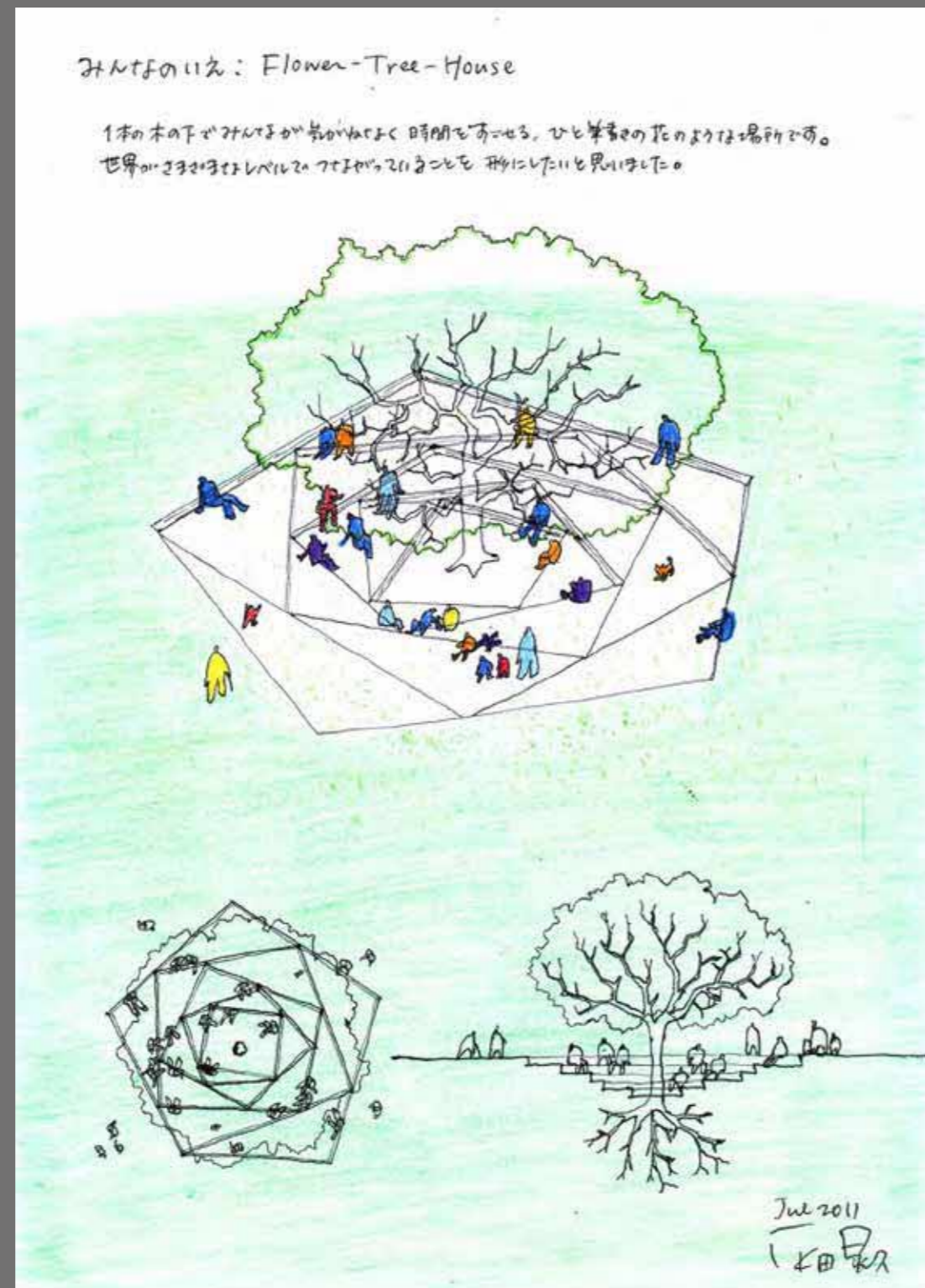
乾久美子 [建築家・Y-GSA 教授 / 東京]



Zaha Hadid [建築家 / イギリス]



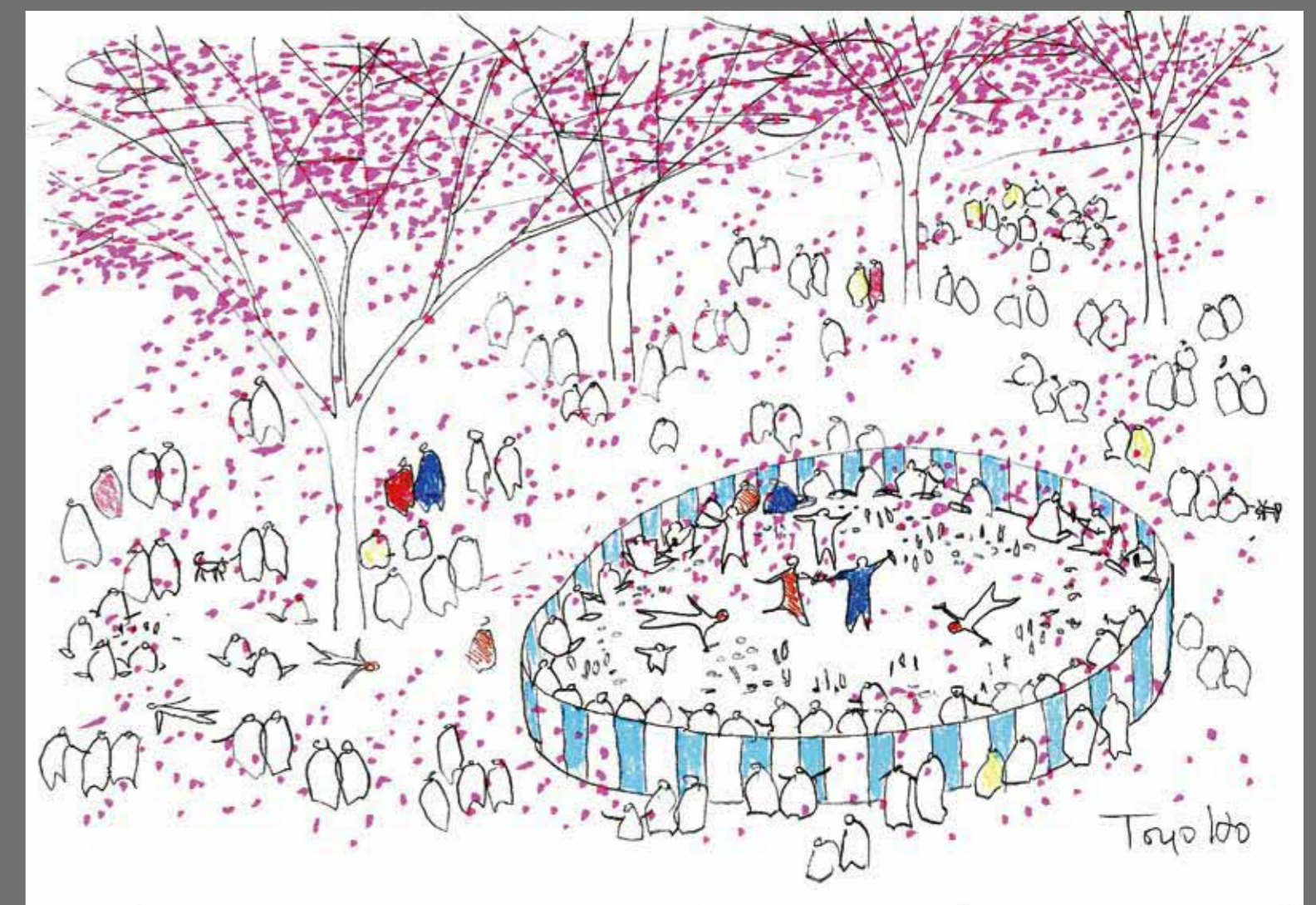
藤本壮介 [建築家 / 東京]



平田晃久 [建築家・京都大学建築学科教授 / 東京]



石上純也 [建築家 / 東京]



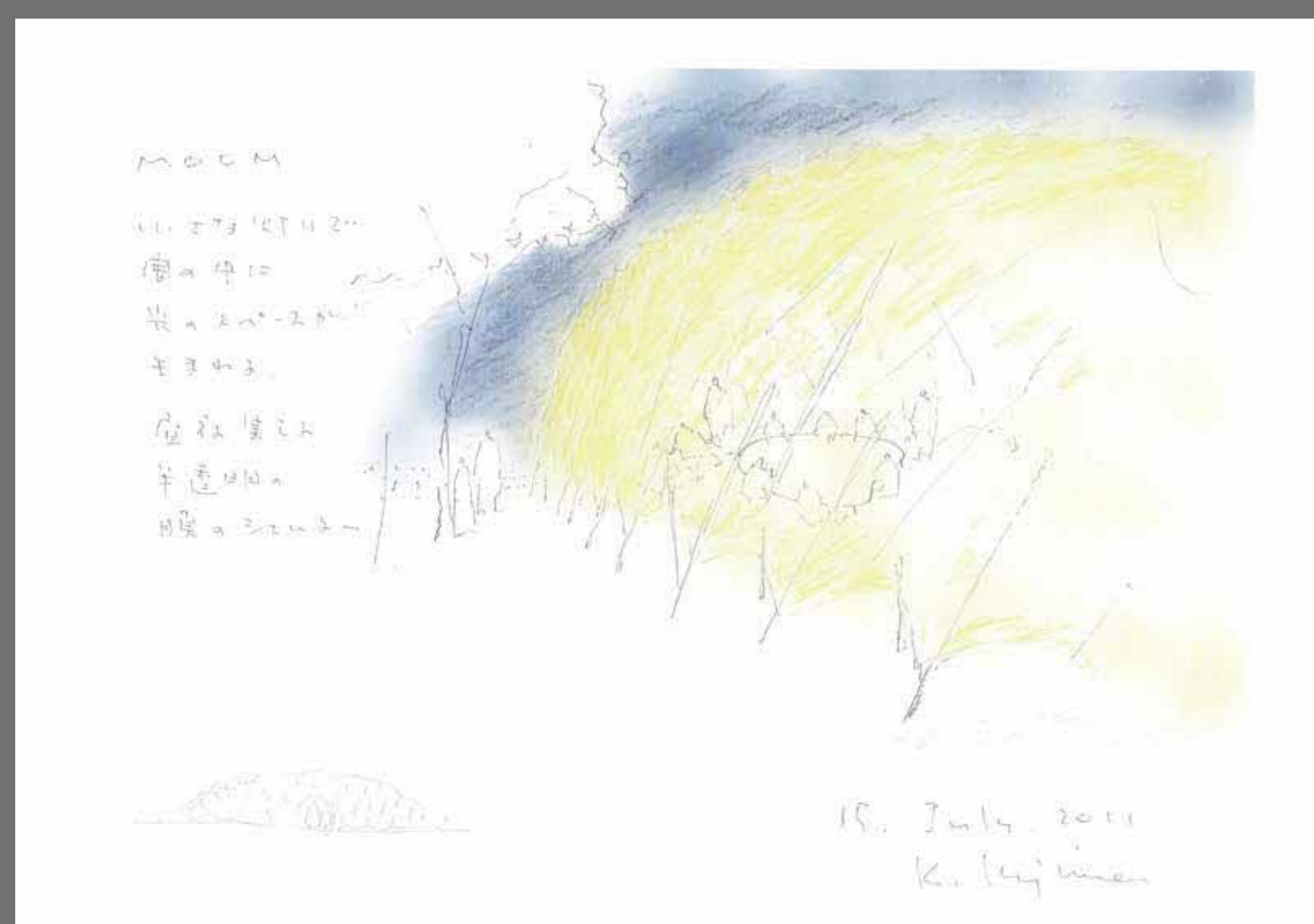
伊東豊雄 [建築家 / 東京]



妹島和世 [建築家 / 東京]



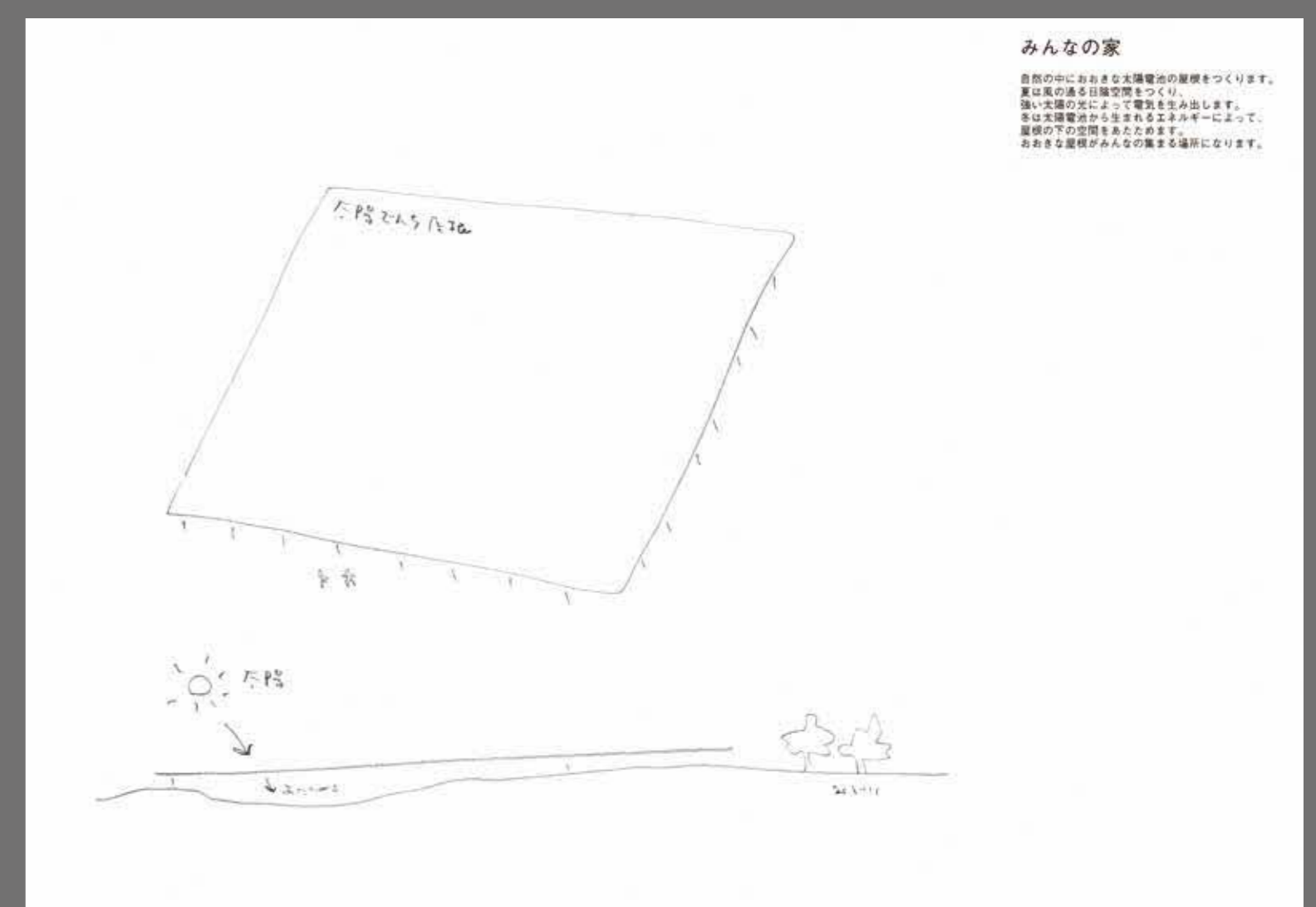
山本理顕 [建築家 / 神奈川]



小嶋一浩 (シーラカンス) [建築家 / 東京]



西沢立衛 [建築家 / 東京]



西沢立衛 [建築家 / 東京]

宮城野区 みんなの家の

「みんなの家」をつくろう

熊本県では、被災された方の憩いの場として「みんなの家」を提供してはどうかという伊東豊雄コミッショナーからの提案に賛同し、くまもとアートポリスの初めての県外事業として、熊本県内の建築関係団体や学生などのボランティアと連携しながら、仙台市宮城野区に建設された仮設団地に集会施設「みんなの家」を建設しました。



住民の方との話し合い



熊本での材料調達・仮組み



材木が仙台へ出発



仮設住宅での建て方



上棟式での餅まき



「みんなの家」の竣工時の芋煮会



竣工から3年後に開催された3周年の集い



仮設団地の解体に伴い移築

阿蘇の みんなの家

東北の経験を、熊本につなぐ

東日本大震災の翌年に発生した熊本広域大水害は阿蘇地域を中心に大きな被害をもたらしました。熊本県では、仙台市宮城野区にみんなの家を提供するプロジェクトで培ったノウハウを活かし、被害を受けた方に少しでも安らぎを感じていただけるよう、県内で初めて「みんなの家」を建設するプロジェクトに取り組みました。



住民の方との意見交換会



上棟時の餅まき



みんなの家は住民の憩いの場として活用された



住民の方からの意見を踏まえて、土足のまま
上がって使えるよう広い土間を設けた



熊本の みんなの家

規格型・本格型

できる限り多くの仮設住宅に憩いの場を

平成28年の熊本地震では、広範囲にわたって甚大な被害が発生しました。熊本県では、4303戸建設された仮設住宅の集会施設をすべて「みんなの家」として整備し、その数は84棟となりました。仮設住宅の建設に合わせて迅速に整備できるよう、東北や阿蘇での「みんなの家」の経験を生かして規格プランに統一した“規格型”「みんなの家」、そして住民の意見を伺いながら個別に設計した“本格型”「みんなの家」の2種類の整備を行いました。



熊本 みんなの 家

さらなるコミュニティ形成支援の試み

集会施設が整備できなかった小規模な仮設団地を対象に、「日本財団わがまち基金」により支援をいただき、11棟の「みんなの家」を整備しました。一般財団法人熊本県建築住宅センターとの協働により進められたこのプロジェクトは、入居者の方と意見交換を行いながら計画を進め、様々な地域から集まった世帯が生活するうえで、孤立しないよう、気軽に集い、コミュニティが創造されることを願い、それぞれ特色のある「みんなの家」が整備されました。

プッシュ型



熊本の みんなの家

地域の拠り所、つながりの再生

公民館型

平成28年熊本地震では、地域の住民が集う公民館も被災しました。地区住民は集い、語らう場としての公民館の再建を待ち望んでいました。熊本県では「日本財団わがまち基金」により支援いただき、一般財団法人熊本県建築住宅センターとの協働により、被災した地区の公民館を地域再生の拠点となる「みんなの家」として整備する取り組みを進めました。住民の方と意見交換を行いながら計画を進め、県産木材を使用し、避難所としても利用できる防災機能を持つ「みんなの家」が10棟整備されました。



みんなの家 利活用

地域の核として生き続ける「みんなの家」

仮設団地の集会施設として整備された「みんなの家」。被災された方の憩いの場として大切に活用された「みんなの家」は仮設住宅団地の閉鎖に伴い、当初の役割を終えます。熊本県では、この「みんなの家」を単に解体するのではなく、新たな地域づくりの場として、移築などにより活用する取り組みを進めています。解体に伴う廃棄物を減らすだけでなく、それを地域の復興のために活用する、持続可能な社会の実現に向けた取り組みです。



みんなの家を移築活用し、被災した公民館を再建。

みんなの家を移築し、展望所の休憩スペースに活用。



©Kyoko Omori



©Kyoko Omori

くまもとアートポリス 最新プロジェクト

熊本地震からの “創造的復興”を目指して



南阿蘇鉄道高森駅周辺再開発

熊本地震により甚大な被害を受けた、高森町と南阿蘇村を結ぶ「南阿蘇鉄道」。地域の公共交通の基軸であり、基幹産業である観光業を支える南阿蘇鉄道の復旧は、この地域の復興の鍵となる。創造的復興に向けて南阿蘇鉄道の高森駅とその周辺を再開発するプロジェクト。



熊本地震震災ミュージアム中核拠点施設

熊本地震の記憶や経験、教訓を後世に遺し、国内外に発信するために熊本県が整備を進める「熊本地震震災ミュージアム」の中核拠点となる体験展示施設を建設するプロジェクト。



株式会社 エバーフィールド木材加工場



木造建築産業のさらなる活性化や職人の人材育成を進めるために整備する木材加工場。地域産材によるレシプロカル構造で、これまでにない美しい木造架構を目指すプロジェクト。



立田山憩の森・お祭り広場公衆トイレ

県民の憩いの場となっている森の中にある公衆トイレの建替えを行う、プロジェクト。地域産材を活用し、構造体の一部に間伐材を使用。

